様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５９３３５４

研究課題名（和文）思春期の子どもを持つ親が家庭で自信を持って性教育できるためのプログラムの開発研究

研究課題名（英文）Development of the program which support the parents to perform sexuality education for their children at home

研究代表者
村井　文江（MURAI, FUMIE）

筑波大学・医学医療系・准教授

研究者番号：４０２２９９４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：小学校3年生および中学校2年生の親を対象に、家庭での性教育を支援するプログラムを開発・評価した。小学校3年生の親を対象とした80分1回の学校を場としたポピュレーションアプローチ型のプログラムを開発した。対照群を有する事前・事後テストでは、プログラム介入後1か月において、性教育への自信が高まっており、家庭における実施率も16.8%から67.4%に上昇した。思春期前または始めにおいて、親が性教育をすることを促進するプログラムとしての有用性が示された。中学校2年生の親を対象としたプログラムでは、実施における困難があり、適切な評価まで達成しなかった。

研究成果の概要（英文）：We have developed a program to support sexuality education for schoolchildren by their parents at home. For the parents of 3rd grade elementary schoolchildren, the program is population approach concept, and is one session for 80 minutes at the classroom of the children’s school.
We have evaluated the effect of the program by pre- and post- questionnaires, and result of the questionnaire after one month of the program reveals that the parents have gained self-confidence of sexuality educations for their children, and the rate of the education performing parents is increased from 16.8% to 67.4%. These results suggested the effectiveness of our program to promote sexuality educations by parents.We also tried another program to support parents of 2nd grade junior-high schoolchildren, but effectiveness of the program was not evaluated, because performing the program has some difficulties.

研究分野：看護学

キーワード：親への性教育支援　プログラム開発　思春期　自己効力感

１．研究開始当初の背景

思春期にある子どもたちにとって、性への関心を適切な行動に発展させ、健康な性を獲得することは課題である。高校生における性行為経験率は、上昇傾向は治まってきているが、高い率を示しており男子 26.6%、女子 30.0%1)である。また、『健やか親子 21』の取組みによって、10 代の人工妊娠中絶実施率は減少傾向にあるが、性感染症罹患率は上昇を続けている。

このような思春期の子どもたちの性の健康を支援する１つの方法として性教育がある。わが国の性教育は、学校を中心に実施されてきたが、現在の思春期の性行動の状況や社会状況を踏まえ、家庭での性教育の強化が求められている。親が性教育をすることは、性教育の基盤である、自己肯定感や価値観、信念を強化するとともに、個々の子どもにあった適切な性教育を提供することになると考えられる。

子どもの性教育における親の効果的な関わりについては、欧米の研究において明らかにされてきている 2)。わが国においても、家族適応（家庭が楽しい）が思春期の性行動に関連することが示されており 1)、家庭や親の性教育における役割の重要性は認識されている。しかし、親を対象とした性教育に関する研究は少なく、思春期の子どもを持つ親への性教育の支援に関する介入研究はない。

このような状況を踏まえ、親たちに性教育支援に対するニーズ調査を本研究のフィールドであるＡ市においてニーズ調査を実施した。結果、70.3%の親が参加を希望していた。家庭での性教育は、85.4%が必要と認めていたが、実施率は 32.6%であった。また、実施している親のうち、自信をもって家庭で性教育ができている人は約半数であった。親が、家庭において性教育に取り組めるように支援すること、そして自信をもってできることが必要であることが示唆された。

２．研究の目的

思春期の子どもを持つ親に対して、家庭で自信を持って性教育をすることを促進する『性教育における親支援プログラム』を開発し評価することである。

思春期の健康を支援するために、思春期の子育て支援として、親が家庭で自信をもって性教育を行うための支援プログラムを開発することは意義があることと考える。

３．研究の方法

思春期の子どもを持つ親として、小学校 3 年生と中学校 2 年生の親を対象としてプログラム開発・評価を計画した。実施状況が異なるため、プログラムの対象別に述べる。

１）小学校 3 年生の親に対するプログラム開発・評価

（１）プログラム開発

ニーズ調査および文献検討の結果を踏まえ、ロジックモデルの“ｉｆ － then”の仮定に基づいてプログラムを作成した。プログラム内容は、性教育に対する親の自信を高めるために、セルフ・エフィカシーのモデルを適用した。多くの親が自信を持って性教育をすることができることを目標として、学校を発信源としたポピュレーションアプローチ型で実施可能性を優先して計画をした。

（２）プログラム実施・評価

小学校 16 校に在籍する 3 年生 723 名と親を対象として、開発した性教育支援プログラムを実施した。

プログラム評価は、親を対象として無記名自記式質問紙法による対照群を有する事前事後テストデザインで行った。対照群は「いのちの誕生」のみ参加した親である。評価時期は、介入前、介入直後、介入１か月後とし、即時的アウトカムを評価の対象とした。

評価項目は、性教育スキルの自信、性教育をする自信、思春期の養育行動、子育ての自信、性教育実践者の割合である。性教育スキ

ルの自信は、18 項目、3 因子：第 1 因子「子どもと性に関するコミュニケーションをする」(9 項目)、第 2 因子「性教育の環境を整える」(5 項目)、第 3 因子「子どもの性に関する状況を理解する」(4 項目)で構成された。3 因子および全体の Cronbach's α は 0.80 以上であり、内部整合性は確保された。5 段階尺度で 18 項目での得点の範囲は 18 点から 90 点である。

思春期の養育行動は、養育スキル尺度を使用した。養育スキル尺度は、23 項目から構成される 6 段階尺度で、得点の範囲は 23 点から 138 点である。「道徳的スキル」、「自尊心スキル」、「理解関心スキル」の 3 因子構造である。3 因子および全体の Cronbach's α は 0.80 以上であり、内部整合性は確保された。

性教育をする自信および子育ての自信は VAS (Visual Analog Scale) を使用した。10cm のスケールを水平にして用い、得点は 0 から 100 の整数で示した。

介入群と対照群における評価変数の比較には、実践者の割合を除き 2 元配置分散分析を用いた。実践者の割合は χ^2 検定にて比較した。性教育の自信と性教育実践の関連は、多重ロジスティック回帰分析にて検討した。また、性教育の自信を促した要因については、内容分析にて質的に分析した。

その他、学校側から実施に関する意見をもらい、プログラム実施上の評価とした。

２）中学校 2 年生の親に対するプログラム開発・評価

（１）プログラム開発

ニーズ調査および文献検討の結果を踏まえ、子どもと保護者が共に聞く事のできるプログラムを作成した。

（２）プログラム実施・評価

2 年間で中学校４校においてプログラムを実施した。プログラムに参加した親、311 名を対象にプログラムに対する評価を自由記述で回答してもらった。

３）用語の定義

本研究においては、以下のように定義した。

１）親：生物学的関係、法的関係に関係なく、家庭内において子どもの養育を担っている成人とし、保護者も含む。

２）家庭での性教育：親が、性教育について理解し、各自の考えの下、養育している子どもが性の問題・課題について自ら考え、判断し、意思決定し望ましい行動がとれるように関わること。

３）思春期：第二次性徴の出現から性成熟の完成までの期間であり、８、９歳から 19 歳がその期間に相当すると定義する。

４）自信：セルフ・エフィカシーと同様の意味で用いる。(坂野、前田、2002、p.4) と定義されている。本研究では、この定義を踏まえ、自分がする特定のことができるという見通しとして、自信を定義する。

４．研究成果

プログラムの対象別に主な成果を述べ、最後の全体の成果をまとめる。

１）小学校 3 年生の親に対するプログラム開発・評価

（１）プログラム内容

１回 80 分の内容で、子どもたちを対象にした「いのちの誕生」への授業参観 40 分、親を対象にした講座「家庭における性教育」40 分である。

（２）評価：プログラムの事前・事後評価

介入群 181 名と対照群 71 名について分析した。

性教育スキルの自信は、交互作用が認められたため、単純主効果の検定を行った。介入群は介入１か月後に有意に得点が高くなっていた、$F(1、500) = 20.047$、$p < .001$。また、介入 1 か月後において介入群は対照群に比較し有意に得点が高かった、$F(1、500) =$

4.547、p = .033。対照群および介入前では有意差は認められなかった。

性教育をする自信は、介入群で介入１か月後に得点が有意に高くなっていた（Z = -8.323、p < .001）。対照群は有意差が認められなかった。また、介入１か月後において、介入群は対照群に比較し有意に得点が高かった（U = 4058.5、p = .002）。介入前は、介入群と対照群に有意差は認められなかった。

思春期の養育スキルは、介入前－介入１か月後、介入群－対照群での有意差は認められなかった。また、交互作用も有意ではなかった。

子育ての自信は、介入１か月後に介入群の得点が有意に高くなった（Z = -3.441、p = .001）。対照群では有意差が認められなかった。また、介入群は対照群と比較し、介入１か月後において有意に得点が高かった（U = 7090.5、p = .009）。介入前は有意差が認められなかった。

性教育に関する自信を促進する要因としては、プログラムを通して制御体験、代理体験、言語的説得、行動の方略、行動に対する意味づけ、生理学的情動的状態が体験されていた。

性教育実践は、介入前 16.6%に対して、介入１か月後では 67.4%であった。対照群においては 50.7%であり、介入群における実践の割合が有意に多かった、$\chi^2(1)$=6.080、p = .014。介入後１か月間の性教育の実施に対して、介入直後の性教育をする自信の影響が認められた、OR = 2.152、$95\%CI$ [1.049 , 4.416]。

２）中学校 2 年生の親に対するプログラム開発・評価

（１）プログラム内容

思春期の発達、性行為に対する興味関心、性行為の問題を中心として親子でいっしょに聞くことができる内容とした。時間は 60 分。2 年目は、親のみのフリーディスカッションを実施した。

（２）プログラム実施と評価

親子に対してプログラムを実施することができた。アンケートの回収は２割弱であった。自由記述からは、子どもたちの性に対する状況が理解できた、子どもといっしょに話を聞く事で子どもに性の話をしやすくなったということが得られた。一方で、性のことは学校に任せたいとの意見もあった。親のみのプログラムでは、個々の抱えている問題、疑問が出される中で、具体的な対応が考えられた、子どものことを少し客観的に見てみようなどの意見が見られた。

３）まとめ

小学校 3 年生の親を対象とする性教育を支援するプログラムでは、1 回のみの短い時間のプログラムで、性教育に対する自信が上昇するとともに直後から１か月後の性教育の実施率が上がることが示された。親が思春期の始まる頃に性教育を実施することを促す有効なプログラムが開発できたと考えられる。

一方、中学校 2 年生の親を対象とした性教育を支援するプログラムでは、ニーズ調査におけるニーズは高かったが、実施における困難があり、プログラムを適切に評価するところまでは達成しなかった。学校および親の理解を得ながらプログラムを実施していくという課題が残された。

〈引用文献〉

１）日本性教育協会（2007）.「若者の性」白書　第 6 回青少年の性行動全国調査報告―、東京：小学館.

2) Rupp, R. & Rosenthal, S.N. (2007). Parental influences on adolescent sexual behaviors, *Adolescent medicine*, 18, 460-470.（Rupp, R., et al. 2007）

3) 坂野雄二、前田基成（2002）. セルフ・

エフィカシーの臨床心理、京都：北大路書房.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　1 件）
1)村井文江、山海千保子、江守陽子：小学校３年生での“親子性教室”が思春期における家庭での性教育にもたらすもの　親子性教室後の自由記述式アンケートから、思春期学、31(1)、90-91、2013.（第31回日本思春期学会）

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
村井　文江（MURAU、Fumie）
筑波大学・医学医療系・准教授
研究者番号：40229943

(2)研究分担者
江守　陽子（EMORI, Youko）
筑波大学・医学医療系・教授
研究者番号：70114337

山海　千保子（SANKAI, Tihoko）
筑波大学・医学医療系・助教
研究者番号：90438101

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：